

# 戦後秩序を考える5冊

【評者】  
大阪大学専任講師  
藤山一樹



戦争の後、秩序はいかにして再建されるか。この上ない難問である。世界政府が不在の中、昨日まで攻撃し合っていた国家が、明日からの共存に向けて合意せねばならない。それでも戦争が終わるたび、国家は互いの行動を予見するための枠組みを創ろうとしてき

た。戦争の続く今こそ、秩序の本質を歴史に探るべきではないか。  
①は外交史の古典の新装版である。一九世紀初め、ナポレオン戦争後の欧州に築かれたウィーン体制に、やがて米国務長官となる政治学者は国際秩序の要諦を見た。その一つは勢力均衡で

ある。大国のパワーが強すぎも弱すぎもしない状況が安定をもたらすとの原理は、欧州に古来伝わる叡智だった。他方、一八一五年の講和で特筆すべき点は、均等なパワー分布だけでは秩序をもちや維持しえない、と戦勝国が悟ったことである。イデオロギーに

## ① 回復された世界平和

ヘンリー・キッシンジャー・著  
原書房、2009年

## ② Not One Inch: America, Russia and the Making of Post-Cold War Stalemate

M. E. Sarotte・著  
Yale University Press、2021年

## ③ 戦後和解

——日本は〈過去〉から解き放たれるのか  
小菅信子・著  
中公新書、2005年

## ④ 夢遊病者たち (1・2)

——第一次世界大戦はいかにして始まったか？  
クリストファー・クラーク・著  
みすず書房、2017年

## ⑤ ワーニャおじさん

アントン・チェーホフ・著  
岩波文庫、2001年

人々が熱狂する時代、均衡を回復するための限定的な戦争も、一度始まれば秩序を焼き尽くす恐れがあった。

そこでウィーン体制の第二の柱は、キッシンジャーが「正統性」と呼んだ、大國間の合意となる。敗戦国を含め戦後の現状に関する共通認識があれば、交渉の余地が生まれ、武器によらずとも利害は調整されるというわけだ。

しかし、戦後秩序がいつでも勢力均衡と正統性に基礎づけられるとは限らない。例えば冷戦終結後である。第二次大戦後、東西陣営が地球規模で対立した冷戦もまた、時代を画す一つの戦いだった。西側の集団防衛枠組み・NATOの将来に関し、ロシアを含む主要国が合意できるのが冷戦後欧州秩序の課題となる。

②は一九九九年のNATO東方拡大に至る過程を論じた最新の研究で、冷戦後の欧州には勢力均衡も現状の合意

も確立されなかった点を浮き彫りにする。冷戦が育んだ対ソ同盟は、主に九〇年代に米國が下した諸決定を通じて、国内が安定しない新生ロシアの國境へと近づいた。

勢力均衡と正統性を創るだけでも難儀だが、それに成功しても秩序が長続きするかは未知数である。戦争が広く國民を巻き込んだ場合、戦後の社会に赦しの精神が行き渡らねば盤石な秩序とはならない。③は戦争終結後も國民の間に残る感情的摩擦について概説する。政治も戦争も大衆化した時代、集団的な憎悪を和らげるのは至難の業だ。過去を記憶しつつ旧敵と共存する試みは、当事國の政府と民間による弛みない共同作業となる。

たとえ以上の条件を満たした秩序が生まれても、破壊の力と意志を持つ國が現れれば一たまりもない。また時には意図せぬ帰結が重なって秩序が碎け

散る場合もある。欧州の一九一四年は後者の代表例だろう。

④は第一次世界大戦の勃発に至る過程を、政策決定者の認識と彼らを取り巻く要因に着目して描く。指導者が自國に都合の良い政策を立てるばかりで、破局の結末に思い至らぬ状況を、著者は印象的な題名で表した。戦後秩序の設計図に、互いの論理を正しく伝え合う仕組みは必須である。

分権的な世界に生まれる秩序はなんと脆いのか。完璧たりえず、すぐに壊れるかもしれない秩序を、それでも人間は創る。廢墟の中で最後の投げ所は、希望を持ち続ける胆力に違いない。

⑤は世界の縮図のような破局と再生のドラマだ。皆が何かを求め、傷つけあった末に日常は崩壊する。幕切れ、それでも明日へと歩き出すソーニャの姿は、苦難に満ちた戦後世界をやさしく照らす灯となる。●